奄美・沖縄の民間説話研究の回顧と展望

-私的回想などを中心に―

(一) はじめに

民間説話群との比較研究などについても言及することにしたい。 らの回顧を主として交えながら、奄美のユタの呪詞との遭遇から、 展望を試みたいと考える。そのために、若干の私的な体験とそれ 伴い、多くの比較研究も活発に発表されている現状である。 カバーできたと指摘できよう。また、このような作業の進展に する島々の全地域からの資料化がまだ不完全ではあるが、 このような現状を勘案しながら、本地域における研究の回顧と 奄美・沖縄の民間説話研究の現状は、 わが国南方海上に散在 ほぼ

> 主義、 換して教壇の教師たちは、平然として軍国主義を非難し、 終戦となり、周辺はアメリカ軍の空襲で、焼け野原になり、 の食糧の調達にも事欠く状態で、さらには、今までの指導を転 の学習などは、ほとんど皆無の状態であった。そこに、突然の 人権尊重を説くということになり、 混乱は極まれりとい 日

山 下 欣

題となった。そのために、まずは、私自身の生地である奄美 うのが、私たちを取りまく情勢であった。 自己確認の作業を始めるというのが、この時代の若者たちの課 そういう状況で、自分を失しないでいるためには、

確固たる

出発

育を受け、連日、軍事教練、 ている現状である。私たちは、思春期を徹底した軍国主義的教 流派を占めていたが、二〇一〇年の現在、 私たちの世代は、戦中派と呼ばれ、長く日本社会における主 奉仕作業などに明け暮れ、 全くの少数派になっ 教室で

\equiv 偏見

の回想、

回帰を考えるようになった。

この時、 展開する歳時習俗、なつかしい方言などを想起したのである。 育った奄美の山野、そして奄美の人々、生活、そして、そこで 考えてみると、奄美大島で生を受けた私にとって、生まれ、 やはり、私の母もその一人であった民間の巫者ユタが

視点で、これを排撃しようとする態度に、反発を、強く覚えた 奄美の人々の生活の実態について目をそらし、偏見からのみの を知っていた。奄美の有識者たちのユタ排撃の態度と蔑視には、 たので、奄美の人々にとってユタが、どのような存在であるか 日常的にユタの家を母親とともに訪ねることが習慣になってい めユタになり、奄美大島の首邑でもっとも高名のユタの信者の に織りこまれていた現実があった。そして、私の母も病弱のた 時など病院へ行くが、またユタの家を訪ねているのが日常生活 年の運勢を判断してもらうためにユタの家を訪ね、体調不良の ある。反面、考えてみると、奄美の人々は、正月には、その一 辱であると非難するばかりであったのには驚いた記憶が鮮明で いてみても、ほとんどの識者は、あのような迷信は、奄美の恥 めようとした。しかし、奄美の研究をしている先学の人々に聞 し、果して、ユタはどのような存在であるかを知ることから始 の生活に欠くことのできない存在であり続けている点を確認 タ」とは、なにかを知るということから始まったのである。 のである。私の奄美を知ることへの歩みは、このようにして、「ユ 一人であり、本人も神拝みをするようになっていた。そのため、

四)ユタの実態

高な立場からでもなく、私的な関心という立場からであった。「ユタ」を知るということは、なにも、学問的動機とか、崇

ずは奄美の名瀬(現奄美市)において着手したが、多くの困難しながら、このようなユタの実態を知りたいという調査を、ま私の研究は、このような単純な動機からの出発であった。しか

に逢着した。

想起されるのであった。ユタは、現在でもそうであるように人々

把握しようと努力したのである。
田難を少しずつ消しながら、まずは、奄美大島のユタの実態を共通語を自由に使えないということなどがあった。このようなける官憲の弾圧の記憶が生々しく残っていたこともあり、また理由で婉曲に断わられることが多かったが、それは、戦前にお二、三の知人の紹介でユタの家を訪ねても不在、病気などの

(五) ユタの呪詞

呪詞を唱えたのである。奄美の民謡である「シマウタ」と節もリースを紹介され、訪ねた時のことである。急な階段を登りつめた狭夕を紹介され、訪ねた時のことである。急な階段を登りつめた狭クを調査でいた。ここでは、プライバシーもなにもなく、次から次へとユースので、中側に向って、音吐朗々と「オモイマツガネ」(思松金)といって、たのか、あなたへの回答は、この呪詞に答えるのが面倒くさくなったのか、あなたへの回答は、この呪詞に答えるのが面倒くさくなったのか、あなたへの回答は、この呪詞に含まれているといって、かのか、あなたへの回答は、この呪詞に含まれているといって、中棚に向って、音吐朗々と「オモイマツガネ」(思松金)と節もり神棚に向って、音吐朗々と「オモイマツガネ」(思松金)という神棚に向って、音吐朗々と「オモイマツガネ」(思松金)という神棚に向って、音吐朗々と「オモイマツガネ」(思松金)というな場所で、そのユタは、私の質問に答えるのが面倒くさくなったのか、あなたへの回答は、この呪詞に含まれているといって、

の古い歌謡に共通する要素を持つ叙事歌謡であった。 ズムも相違し、 対語・対句を重ねつつ叙事を重ねていく、 古琉球

されているというのが、このユタが話してくれたことであった。 モイマツガネ」の内容に、奄美のユタの問題は、すべてが内包 深い感動を覚えたのであった。この男ユタによると、この呪詞「オ ながら、呪詞「オモイマツガネ」を唱える奄美の男ユタの姿に、 らめくろうそくの灯、鉢巻きをして、手にはススキを振り回し た。狭い空間に、神殿に供えてあるもうもうたる線香の煙、 を指導するユタ)の教示などで自然に修得したらしいのであっ は、先輩のユタの呪詞を聞いたり、親ユタ(ユタに成巫するの てきた白髪の老翁が教示してくれたということであった。初め この男ユタの出自は、名瀬近郊であり、この呪詞は、夢に出 * き

呪詞「オモイマツガネ」

頼んで占いをさせてみると、次のように告げられた。 白するように強要するが、覚えはないという。それで、ユタを だしたのである。思松金の両親は、思松金にきびしく相手を告 されたのである。そうすると、日ならずしてお腹が大きくなり る日の朝、 るとされ、 「オモイマツガネ」は「思松金」とも書く、 毎日部屋にこもって機織りをしていた。すると、あ 東の川で小用をしていると、体全体が日の光に照ら 絶世の美女であ

どの数々の試練を通り抜けて、最後に、父親である太陽に会う どって、天にのぼる。天の入口の番人や竜の牧、 父親に会ってきなさいと話し、門に線香を立て、 は誰だ」とたずねる。オモイマツガネは、天に輝く太陽を指さし、 このようにして按司ガナシの子どものいろいろな挑戦にオモイ 機織とその部品から、弓と矢を造って与える。カネノマタラベ ラベはないので、家に帰り、母親のオモイマツガネに訴えると、 すぐに木戸遊び(家から外に出て遊ぶこと)をした。そうして うことになり、カネノマタラベは、また、母親に「自分の父親 マツガネの援助で勝つが、一番最後に、父親競べをしようとい の矢は天高く飛んでいき、按司ガナシの子どもを打ち負かした。 司ガナシの子どもは立派な弓と矢を持っているが、カネノマタ いろいろな競争を挑んできた。まずは、弓競べであったが、按 いると、ここを支配している「按司ガナシ」(殿様)の子どもが、 あった。カネノマタラベと名づけた。この神の子は、生まれて、 月満ちて生まれた子どもは、 十二ヶ月で生まれた神の子で

「生まれてくる子どもが九ヶ月で生まれると鬼の子。 を受けて生まれたので、ここでは暮してはいけない。

ことができる。父である太陽は、カネノマタラベの爪と自分の

暴れ馬の牧な 線香の煙をた

爪を比較して、自分の子であると認める

そして、カネノマタラベにお前は半分神の血、

半分は人の 地上にも

ĺП.

十ヶ月で生まれると人の子 十二ヶ月で生まれると神の子」という。

3

ようにしなさいという教えを授けて、地上に帰したという。しなさいと話し、高膳の四隅を切り取り、箸にし御飯を食べるという話であった。さらに、高膳に米を盛り、祭り、人助けを天から馬に乗り、ススキを手に下ってきて、ユタの祖になったどり、母とともに人助けするようにと話す。カネノマタラべは、

(七) 奄美のユタと成巫

ユタは、この呪詞を神拝みの時に一種の節をつけて声高らか ユタは、この呪詞を検討する必要性を痛感することになった。 タの唱えるというか、歌いあげるのである。その叙事詩は、古琉成した田畑英勝、亀井勝信、外間守善編『南島歌謡大成 奄美編』 (一九七九) には、ここに提示した呪詞群と類型を示す呪詞群が、形式、内容は不同であるが集成されている。このようにしてユ ア・スト (1) には、ここに提示した呪詞群と類型を示す呪詞群が、形式、内容は不同であるが集成されている。このようにしてユ ア・スト (1) と (2) であるが集成されている。このようにしてユ ア・スト (1) には、この呪詞を神拝みの時に一種の節をつけて声高らか これらを要約すると次のようになろう。

- (1) ユタの成巫過程は、定型的である。
- (2) この儀礼の過程において、ユタは自分の拝むべき守護
- (3)「神がかり」する経過で指導する親ユタが本人の拝むべ

- (4) 神がかりの時に一種の憑依状態に入り、また回復する
- (6) たとえば「オモイマツガネ」の叙事詞を指導してくれる。(5) ユタの唱える叙事的呪詞をうたいあげていくことをす
- る親ユタにならい、うたうことをする。
- 聴など)をも漸次自得していくことをする。(7)このような儀礼的経験を持ち、予知的能力(幻視、幻

その他の多くの付随する儀礼についても神拝みを通じて自得していき、能力のある新巫(ミーユタ)になり、卜占などを通していき、能力のある新巫(ミーユタ)になり、卜占などを通にて、職業的に自立する。しかし、大部分の人たちは、自分のじて、職業的に自立する。しかし、大部分の人たちは、自分のじて、職業的に自立する。しかし、大部分の人たちは、自分のだっ、その理由の多くは病苦などが原因であるが、現代では医療で、その理由の多くは病苦などが原因であるが、現代では医療などの効果がなく回復しない場合が多い。しかし、これらの療などの効果がなく回復しない場合が多い。しかし、これらの療などの効果がなされることによってユタへの信仰が深まるということになる。

(八) ユタの存在と排撃

奄美大島におけるユタへの面接調査によって、以上あげたよ

たのであった。 うな検討により、ほぼ、この調査の見通しをつけることができ

在美の島々には、多くの村落があり、それらに居住し、活躍した。しかし、奄美部島といっても、五島から成り、それぞれにに加入して、奄美のユタの実態を機会を得て発表していくようにした。しかし、奄美諸島といっても、五島から成り、それぞれにした。しかし、奄美諸島といっても、五島から成り、それぞれにした。しかし、奄美部島といっても、五島から成り、それぞれにはまを構えた島々であり、方言を各島々で話すが、これらも悉皆特長を備えた島々であり、方言を各島々で話すが、これらも悉皆特長を備えた島々であり、方言を各島々で話すが、これらも悉皆特長を備えたまって、ユタなどは全くの迷信邪教として弾圧され、その結果、奄美の民俗社会に沈潜していった歴史があり、これらも悉皆によって、ユタなどは全くの迷信邪教として弾圧され、る指示などによって、ユタなどは全くの迷信邪教として排撃された。このようなことで長い間、を秘匿しようとする傾向がみられた。このようなことで長い間、を秘匿しようとする傾向がみられた。このようなことで長い間、を秘匿しようとする傾向がみられた。このようなどに非撃などには照明が当てられることはなかった。迷信邪教として排撃

(九) 呪詞の解明

され、

官憲の弾圧の対象であったのである。

大林太良氏、馬渕東一氏などの知己を得て、指導・助言を得たにおいて逐次、発表していった。その間、関敬吾氏、谷川健一氏、学で開催された第十九回日本民俗学会年会(一九六七年)など民俗学会・季刊)に発表し、喜界島のユタについては、成城大民の調査を終了し、その報告を『民俗研究』一号(鹿児島 このような事情にあるユタの実態を、奄美大島、かけろま島、

ことを銘記しておくことにする。そして、特に、私の関心はユタが吟唱する叙事的な歌謡などに注目するようになった。線香が煙り、ろうそくの灯がゆらめく狭い部屋の神殿を前に、声高らかに唄いあげる呪詞「オモイマツガネ」の解明に集中した。それは「物語」であり、節とリズムを保持する歌謡でもあった。口頭伝承であるため、対語、対句も、乱調になっているが、沖口頭伝承であるため、対語、対句も、乱調になっているが、沖口頭伝承であるため、対語、対句も、乱調になっているが、沖口頭伝承であるため、対語、対句も、乱調になっているが、沖口頭伝承であるため、対話、対句も、乱調になっているが、沖口ので資料化が進み、発表されるようになると、それらを参照などの資料化が進み、発表されるようになると、それらを参照などの資料化が進み、発表されるようになどの研究者を中心に若い研究者が輩出していく状況にあったのはなどの資料化が進力によっている。そして、特に、私の関心はユローであった。

(十) 古歌謡の研究

話群も視野に入ってきたのである。 話群も視野に入ってきたのである。

(十一) 民間調査の開始 — 研究の黎明

継続的であった点において、福田晃氏、岩瀬博氏などの継続的か ていたのみであるから、このような調査は、画期的であり、 戦後には田畑英勝『奄美大島昔話集』(一九五四年)が刊行され 年)、『喜界島昔話』(一九四三年)などがある程度であったし、 があるのみで、奄美では、岩倉市郎『沖永良部島昔話』(一九四〇 戦前では、沖縄においては佐喜眞興英『南島説話』(一九二二年) 会を開催し、『奄美沖縄民間文芸学』を刊行している現状である。 とになり、現在では、事務局を沖縄国際大学において、毎年学 学)は、調査と平行して研究会を開催し研究会報を刊行してきた。 特記すべきは、福田晃氏 ない、ほぼ沖縄各地の市町村の昔話集の刊行をみている。また、 査も始まり、主として、沖縄の市町村の昔話集の編纂作業を行 中心であり、多くの業績をあげている現状である。また、期を 大学)、松本孝三氏、原田信之氏(新見短大)などがそれぞれの の基盤を作り、現在も活発に活躍している。真下厚氏 の業績と昔話集を刊行していった。そして奄美沖縄民間文芸学会 交通関係、また琉球方言の世界への探訪の困難性を克服し、多く □○○一年に本研究会は奄美沖縄民間文芸学会として発足するこ 一にして遠藤庄治氏 九四六年盛夏、 の指導する民間説話の調査が開始された。不便な宿泊 福田晃氏 (沖縄国際大学)の指導する学生諸君の調 (立命館大学)、岩瀬博氏 (大谷女子大 (立命館大学)・岩瀬博氏 (大谷女 (立命館 かつ

つ不屈の意志による成果は驚嘆に値するといっていい。

(十二) アメリカ・インディアナ大学にて

催の夏季セミスターを受講した。この時にデーグ女史の民俗学 は一週間に及び、学会後にインディアナ大学の民俗学研究所主 会があった。荒木博之氏は れ「奄美シャーマン」のフィルム映写を中心に研究発表する機 ディアナ大学で開催され、私も荒木博之氏の紹介で参加を許さ 半生において誠に忘れることのできない事柄であり、この出会 鹿児島民俗学会の席上でお会いすることができたのは、 留学していた荒木博之氏が鹿児島大学に転勤してきたのに偶然 書館に併置されていた「アメリカ読書室」で目にした『今日 た。一九六六年六月に第一回アジア民俗学会がアメリカ・イン のことについて、言及されるのは好まれなかった人でもあっ は、英語についての天才的な能力を持つ研究者であったが、そ いは、私の後半生に決定的な影響を与えたのであった。荒木氏 カ・インディアナ大学でスティース・トンプスン教授のもとに 言及しておいたのであった。ところが、この頃に、このアメリ ンの著書もまた『鹿児島民俗』23号(一九六二年)などでも 10号・11号(一九五六年)に抄訳で紹介し、ビ・エイ・ボトキ 人類学XV・シカゴ の「民俗研究の歩み」についての論文をたまたま鹿児島県立図 アメリカ・インディアナ大学のスティース・トンプスン教授 一九五二』で読んだので『鹿児島民俗』 「薩摩盲僧」の発表であった。 私の後

大学の図書館には、主任教授であるリチャード・エム・ドーソ の基盤になる文献であることを教えられた。このインディアナ 交換論などの出発点になる「クラ」についての記述などの理解 があったが、現在時点で考えてみると、レヴィ=ストロースの 太平洋の航海者たち』であった。このことには、 方法論を取ったが、最初に読まされたのはマリノフスキー『西 ン氏がフルブライト交換教授で東京大学に留学中に東京で入手 若干の違和感

れ、

主流になっていた。

の業績に接することができたのも、この図書館であった。 この図書館であった。そして、奄美・喜界島出身の岩倉市郎氏 おり、『旅と伝説』など全巻に初めて目を通すことができたのも、 された日本民俗学関係の文献が、ほとんど網羅的に整備されて

された年でもあった。 この図書館を基盤にしたので思い出多い図書館となっている。 敬吾・荒木博之・山下欣一共編で刊行することができたのも、 絵画巧芸美術株式会社から『アジアの民話』(全十二巻)を関 ディアナ大学の図書館での文献調査については、後年、大日本 レヴィ=ストロースの著作が英訳でシカゴ大学出版局から刊行 忘れることのできないのに、私どもの滞在の年一九六六年は、 齢不惑を過ぎた頃であったのも思い出の一つである。イン 『悲しき熱帯』は残念ながら抄訳であっ

> 比較研究とその分布と発生した地点を想定する研究とに集中さ 行されている。この理論的背景は北欧を中心にした民間説話の 木博之・石原綏代訳)で社会思想社から現代教養文庫として刊 この中 クス』六巻本があり、これらを研究の三種の神器と呼んでい 『民間説話』については、『民間説話―理論と展開』

た。

して提出し、 ダンデスは、ロシヤのプロップの『昔話の形態学』などを参考 にアメリカ・インディアンの民話の構造論的研究を博士論文と 弱冠二四歳で博士号を得た俊秀であった。 私など

スティース・トンプスンやドーソンの指導を受けたアラン・

この本の表紙には赤い円が描かれていたので、秘かに日の丸本 二〇一〇年刊に全訳が刊行されている。そして、 年でもあった。残念ながら『悲しき熱帯』は部分英訳であり、 の思考』は全英訳で、シカゴ大学出版局から刊行されていて、 スの著作『野生の思考』や『悲しき熱帯』が英訳刊行され 前記の『野生

同時に奄美、 と呼び、持ち歩くのがファッションのようになっていた。 れているのに驚いた記憶がある。 本を読んでいくと、五頁に沖縄の石垣島の川平のことが引用さ A・H・スミスは八重山 沖縄本島、 八重山などの文化人類学的調査を実施 ・石垣島の川平を調査して、 アメリカが沖縄を占領すると

話のタイプ・インデックス』・『民間説話のモチーフ・インデッ

ナ大学では、

スティース・トンプスンの

『民間説話』・『民間説

報告に、

この川平の人々は子どもたちでさえ、木の種類や断片

なんといっても、

民間説話研究のメッカであったインディア

『野生の思考』は全訳であった

た

だつづいていたといえる。一九六六年には、レヴィ=ストロ

がアメリカ・インディアナ大学を訪ねた時は、その余波は、

で非業の事故のため前途ある生涯を閉じた玉置和夫氏 ままである。)このことは、若くして、奄美大島・かけろま島 と訳しているが、シカゴ大学の新版でも「Tyukyu」と誤訳の 魚類・貝類も同じであると記している。 からこれらを男性、女性とに分けて、識別することができるし、 の八重山の新城島の人々が、 島の植物二〇一種のうち (日本語訳は「琉球列島」 (東大大

たのである。 九七種の利用可

能な植物を認知しているという報告を想起させ

る。

た。そのために、 比較研究も重要であるが、このような南の島の人々の生活に即 は知らないが、この草は山羊に食べさせていいかどうかは分る ことができなかったという。負けん気の仲原氏は、 関係からも柳田國男邸へ参上し、散歩にも同道していたという 島出身の研究者であったが、仲原氏は成城学園に勤務していた とを感じた。いうならば、さらなる南の島の人々の民俗知識 0) の初期の論考「小さき蟹の歌」などに示された八重山地方の人々 した「民俗知識」 野草の名前を知っているかと質問されたが、ほとんど答える 探求と認識の必要性を痛感したのである。 シ認識、そして、文化人類学者松井健氏などの研究と連なるこ このような考え方は認識人類学の業績を想起させ、 その途上、 敢然として答えられたというエピソードを想起していた。 柳田國男氏から野草をステッキで指さして、こ への関心も重要だと考えるようになっていっ 奄美の島々の再訪を試み、 仲原善忠氏は久米 ユタとの面接調査 野草の名前 伊波普猷

を丹念に実施することにした。

十三 民間神話との遭

島昔話』 島の創世神話「島建国建」の話だった。それから、「大歳の客」 岩倉市郎氏の求めに応じて第一番に話されたのは、沖永良部 沖永良部島の首邑和泊の小学校家庭科室で、一息つかれた後、 ことに中風を発症されていて歩行が困難ということであ ど八十歳になられた出花池栄(でぎちえい)翁であった。 部の出花(でぎ)から半日かけて歩いてこられたのは、ちょう されていなかったが、その悪道路を杖を頼りに沖永良部島北 沖永良部島は梅雨期で隆起サンゴ礁の島の路はぬかるみ、 昔話調査のために来島し、速記を応用して採話し、 の為に』に忠実に拠っているので、 してある。 法に特徴があるので採録した」とこれまたつつましやかに記録 末尾に「右の二話は昔話の類型に入らないかも知れないが などを聞いている。 部島和泊に到着、 市郎氏の沖永良部島の昔話調査は一九三六年五月十六日沖永良 「八十話」という末尾に記録しておいている。そしてそのまた 沖永良部島は、 実際に話者に会い採話したのは五月十九日午後であった。 (民間伝承の会)を一九四○年に刊行してい 岩倉市郎氏は、 調査は、まず方言を聞くことから着手してい すでに岩倉市郎氏が戦前の一九三六年五 そして、この時の採話記録「八九話」の 柳田國男氏の教示する『昔話採集者 神話・伝説の類には言及し っった。

ゴ」という創世神話などが数多く記録されていて、先田光演氏 がようにしていたと考えられる。しかし、もともと言葉につ ないようにしていたと考えられる。しかし、もともと言葉につ ないようにしていたと考えられる。しかし、もともと言葉につ ないようにしていたと考えられる。しかし、もともと言葉につ ないようにしていたと考えられる。しかし、 ないようにしていたと考えられる。 と思われるのである。その後、機会を得て、私も沖永良部島 と思われるのである。その後、機会を得て、私も沖永良部島 に「創世神話」の痕跡はないかとの探索を継続していた。高田 カネさんは、沖永良部島・東南部、太平洋岸の知名町屋子母(や カネさんがに入るのである。その折に呪詞群を姉上の口誦される のをノートに記録しておかれていた。そこには「シマダテシン のをノートに記録しておかれていた。そこには「シマダテシン

(十四)「シマダテシンゴ」の採話

によって整理発表されている。

大。この時は、知人の紹介もあったので多くの話をして下さった。この時は、知人の紹介もあったので多くの話をしていた。ちょう西安翁を紹介されて、武村さん宅を訪ねることにした。ちょうま、屋子母の近くの大津勘(おーつかん)で建設業を営む武村ために、屋子母周辺を丹念に聞いて廻った。その時、たまたために、屋子母周辺を丹念に聞いて廻った。その時、たまたために、屋子母周辺を丹念に聞いて廻った。その時、たまたのような孔夕の私も、沖永良部島南部の屋子母付近では、このようなユタの人。

は百二十一連からなる叙事的呪詞であった。は驚嘆したが、それをテープに記録した。この「シマダテシンゴ」に節をつけて唱え始めたのが「シマダテシンゴ」についての話を出しタの「かまど祭り」の「シマダテシンゴ」についての話を出した。その多くは艶笑譚であった。話も酒も佳境に進んだのでユた。その多くは艶笑譚であった。話も酒も佳境に進んだのでユ

当時八十歳であった武村西安翁は、まだご壮健で、大工の棟梁を務めておられ、近隣では大工さんの仕事と同時に、仕事の後の 「話の会」でも人気が高いということであった。武村さんには、「トクノシマヌユントゥ」という太陽の出てくる神話も聞くことができたので、これも記録しておいた。武村西安翁に聞くと、まだ小学校に未就学の幼い時に、近くの小学校に遊びに行き、授業をのぞいているうちに、先生の教えることを全部記憶していて、家に帰って兄や姉に教えるという能力があったという。それで、自宅にカマド直し」の祭儀の時に、ユタの唱える「シマダテシンゴ」という創世神話を聞いていて、全部覚えていたというのである。という創世神話を聞いていて、全部覚えていたというのである。この時はまたの日を約して、お別れしたが、いろいろな事情で、この約束は果されなかったのは残念であった。

(十五)民間神話の伝承事例

シドー(一八七八ー一九五二)のいう民間説話の伝播について、ていたスウェーデンの民俗学者カール・ウィルヘルム・ホン・武村西安翁の話を聞くと、すぐにアラン・ダンデスが推奨し

Active Bearerと Passive Bearerとがいて、この前者によって 池に石を投げ入れて、波紋をえがくように伝播するのでなく

時にユタが唱えた「島建国建」(しまだてくにだて)の神話を 島の北西部の出花(でぎ)の出花池栄翁がかまどの建て直しの 市郎氏が戦前に聞いた、沖永良部島の和泊小学校で、沖永良部 受容されて伝播するのだという指摘を実感したのである。岩倉

永良部島知名町屋子母の高田カネさんのノートとそれらを整理 る創世神話は、 ができたのは感激であった。現在、沖永良部島に伝承されてい ろう。それから三六年後に沖永良部島南部で、神話を聞くこと もっとも神聖で、価値ある説話であると認識していたからであ まず、開口一番に岩倉市郎氏に話したのは、出花翁にとっては、 し、発表された先田光演氏の業績 四例ほどが記録されている。前記したが、沖 『沖永良部島のユタ』(海風社、

(十六) 結びとして

一九八九年)は貴重だとすることができよう。

箇条的にあげると、次のようである 分であるが、その分析ということであった。その主要なものを 較研究とは別に、以上のような関心によって、その実践と不十 私の関心と方法を回顧すると、 わが国における民間説話の比

○奄美大島・かけろま島・与路島─歳時習俗・シマ共同体とし ○喜界島 ―動物供犠―シマ共同体とユタの祈願としての儀礼

ての動物供儀

島 ○説話伝承としての祭儀―ユタの関与・宇検村阿室とかけろま (瀬戸内町) 実久の伝承

○徳之島・伊仙町台地における伝承群

○与論島·英雄伝承群 ○沖永良部島・世之主伝承群 「按司ニッチェー・ウプドナター・サービ・

換儀礼・異伝としての那覇市識名花城門中の伝承と儀礼 ○沖縄本島・北中城村・喜舎場・喜舎場公伝承とその分布・ マートゥイ」伝承群

交

○民間神学としての『通俗北山由来記』と「喜舎場子」説話群

の関連と儀礼

○久高島と津堅島の交換儀礼

○宮古・八重山諸島の御嶽起源説話群 人高島と中村渠 (旧知念村・現南城市) との交換儀礼

○宮古諸島における御嶽をめぐる信仰と関連する説話群 以上のように、奄美・沖縄の島々に通底するシャーマニズム

シャーマニズムと関連する民間説話群が、わが国の南の島々の 布・それらの様態の研究、 を試みたのであるが、日本民俗学の正統的な説話群の分類と分 を基盤とする説話群との関連について、ささやかな検討、 ているが、 わが国の 南の島々の実態について、課題としての 国文学的視点などとは、若干相違し

(やました・きんいち)

深層に脈々と流れていることを確認できたと考えている。